

——「2001年9月11日を境にして、世界は変わる」と誰かが言った。



9月11日、私は、ブエノスアイレスの空港で、全てのフライトがキャンセルになったと告げるモニタを前に、呆然と立っていた。まさにその日、事件の渦中であるニューヨークに飛ぼうとしていたからだ。

何が起ったかを飲み込むまでに、しばらく時間がかかった。そして、「ああ、ついに」という、胸に落ちる感覚が次にやってきた。いつ、誰に、どこで、どのような形で起こるかは、わからなかつたけれど、もうすぐ何かが起こるだろう、という予感はあった。

足止めをされる形で、南米で一週間を過ごしたことは、この事件を理解する上で、大きな手助けとなった。いかにアメリカという国が憎まれているか、ということを人々の反応から知ることができたからだ。アメリカの豊かさに憧れを抱き、しかしそれが自分たちの生活を豊かにするものではなかったという失望感が、人々を絶望の縁に追いやっていた。テロの被害者に対しては遺憾の意を述べつつも、多くの人の心の中には、「これが答だ」という認識が強くある。絶望をひっくり返すカタルシスが、今回のテロ事件の中に含まれていたようだ。世界の人口の割合で見た場合、強者アメリカに否定的な感情を持つ人の割合は、もしかしたら、70%を超えているのかもしれない。それだけの苦しみと憎悪の感情が世界に渦巻いている。

フライトが復活すると、私はすぐにニューヨークに飛んだ。起こったアリティそのものを、自分の肌で感じたいと思った。着陸態勢に入った旅客機

が、ワールドトレードセンターの上空を飛んだ時、摩天楼の間にぽっかりと空いた穴が見えた。まだくすぶり続けている焼け跡からは、煙が立ち上っている。厳重なチェックを受けつつ、閑散としたラガーディア空港に降り立つと、まず、困ったのが全ての公衆電話が不通になっていたことだ。なんとか手段をみつけて、クイーンズに住む友人の家に到着した。街中の家、店、車などに星条旗が掲げられている。異様な光景である。

さっそく私が、事件の現場に行きたいと告げると、友人はひるんだ。事件のあった瞬間、彼女はマンハッタンに向かう橋の上にいた。旅客機がワールドトレードセンターに衝突する、まさにその情景を、自分の目で見てしまっていた。それ以来、マンハッタンの中に足を踏み入れていないという。私が自分一人でも行くと言ったら、彼女も一緒に来る決心をした。彼女のすすめで、私達はまず、ユニオンスクエアに向かった。

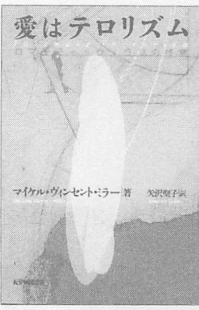
ユニオンスクエアでは、事件以後、様々な集会が行われている。公園いっぱいに置かれた献花、平和の歌を歌う人々、お経をあげる僧侶の姿、老若男女が論じ合う公開討論会。その風景は、アメリカそのものであるように見えた。そこはかとなく、ある種の嗜癖を感じてしまう。

そして、封鎖されているエッジぎりぎりまで行くために私達は、再び地下鉄に乗った。「ワールドトレードセンター行」と書かれた地下鉄マップが、今もニューヨーク中に掲示されている。事件以後、一週間が経ち、路上の清掃は進んでいたけれど、煤と煙の匂いが、

不穏な気配を漂わせていた。兵士、消防士、警官達が街に溢れている。ついに、「穴」のすぐそばに到着した。事件の現場は、意外にもひっそりしていた。ぐにやりと曲がった鉄骨が、奇妙で非現実的な風景を作っている。言葉を失った私達は、近くの小さな公園で、しばし腰をおろした。その時、一頭のあげは蝶がふわりと飛んでき、私の目の前の木の葉に留まった。この季節、この場所に、なぜ蝶がいるのかわからない。私がすぐそばに近づいても、飛び去ろうとしない。時間が止まったかのように、ただ静かに、そこにいる。廃墟とあげは蝶。それが、私の見てきたニューヨークの風景だ。

友人はユダヤ人である。また、ホリスティックな世界観を支持している人もある。宣戦布告をした大統領を9割のアメリカ人が支持している、と報道されていたが、私が出会ったアメリカ人は、戦争反対の立場をとっている人も多かった。報道と民意のギャップがここにある。友人もまた平和を求める気持ちを強く持っていた。しかし、その友人さえ、今回起きた事件の本質には、まだ気づいていないようだった。なぜ、アメリカ人がこんなにひどい目に会わなくてはいけないのか、と憤っていた。優位な立場にいる人の鈍さというものがたしかにある。また、強者が痛手を受けることで、自らの絶望感から逃れたい人々の単純さもある。そして、それをこのように眺めている第三者の立場も。今、世界は思考を始めている。

text by Tehanu



『愛はテロリズム』  
マイケル・ヴァンセント・ミラー  
紀伊國屋書店 ￥2300



『魂の殺人』  
A・ミラー 新曜社 ￥2800



『破壊』(合本)  
エーリッヒ・フロム 紀伊國屋書店 ￥4800



『敵の顔』  
サム・キーン 柏書房 ￥4660

『紛争の心理学』 講談社 ￥700  
プロセス指向心理学の理論と実践の体系を個人ではなく、社会集団に応用した本書は、人類の「紛争」から集団と個人を解放し、新たな統合と自覚に支えられた共同体を目指す。



『プロセス指向心理学』 春秋社 ￥2900  
ユング心理学の流れを組む、プロセスワークの全体像を紹介。錬金術、タオイズム、現代物理学、様々な心理学を網羅し、一つの可能性を提示している。

『自分さがしの瞑想』 地湧社 ￥1600  
夢やからだの症状、対人関係などのワークが記されている本書は、そこで使われている用語やその意味が詳しく紹介されている。東洋と西洋の手法が統合されたプロセス瞑想の基本書。

『ドリームボディ・ワーク』 春秋社 ￥2300  
身体的疾患の背後にいる意味を検討するために著者は夢に注目した。夢と身体の共時的な関係性にフォーカスするドリームボディ・ワークの実例を紹介。

『ユング心理学の新たな発展』 山王出版 ￥1359  
本書はミンデル氏の講義録を中心にS E N (Spiritual Emergence Network)の主宰である吉福 伸逸氏との対談と講義も収録している。

『うしろ向きに馬に乗る』 春秋社 ￥3200 (Amy Mindell氏との共著)  
ミンデル氏のワークではどのようなことが行われているのか?本書は実際のワークで行われているクライアントとのやり取りを対話形式で記載。進行の仕方が明らかになっており興味深い。

ミンデル氏の最新刊は新刊和書紹介ページにあります。  
『シャーマンズ・ボディ』 P12 『24時間の明晰夢』 P16



『キリスト教とセックス戦争』  
カレン・アームストロング 柏書房 ￥4700



『マホメット』  
井筒俊彦 講談社 ￥540

マホメット

Muhammad

井筒俊彦



『フェア・トレード』

マイケル・バラット・ブラウン 新評論 ￥3000



『バタフライ・パワー』

J・ブリッグス+F・D・ビート ダイヤモンド社 ￥2000

キストとなるだろう。そう、誰の中にも、破戒衝動は眠っている。フロムの『破壊』は、研ぎ澄まされた知性によって、その姿を浮き彫りにした名著である。その本質を一度は自分でふりかえってみる必要があるだろう。人間は、何のために人を憎むのか？それは、自分の中にある不安と恐怖を「敵」という対象に投影することによって、自身の無価値感を忘却するという、逃避行動なのかもしれない。キーンの『敵の顔』は、戦時のポスター、物語、コミックの中で、敵がどんな風に描かれてきたかを紹介するユニークな本である。キリスト教というシステムは、他の宗教のみならず、女性の存在に対しても抑圧する構造を作ってきた。『キリスト教とセックス戦争』では、『神の歴史』でキリスト教、ユダヤ教、イスラム教をめぐる歴史の真実を表舞台上に上げた著者が、西洋における女性観念の構造に光を当てた。世界宗教の一

つであるイスラム教とは、どのような本質を持っているのか？多くの人口を抱えるイスラム世界の真実を知るためにには、まず、その教祖であるマホメットの実像について、学んでみてはどうだろう。いかにしてイスラム教が生まれたかに触れるためのテキスト、『マホメット』。今回のテロ事件には、富裕層と貧困層のギャップが生み出され、苦しみの要素が大きく関わっている。資本主義経済のアンバランスを解決する糸口として、『フェア・トレード』という発想を知っておきたい。大きな変容が起きる時、世界はカオスへと向かう。光が生まれると同時に、闇も生まれる。言い替えれば、その兆候である理不尽な現象が現れた時こそ、私達は、カオスの中にいる、ということを実感できるということでもある。『バタフライ・パワー』は、蝶の動きによく似た現象を、創造性のプロセスとしてとらえる最新のカオス理論の一つ。

ミンデル氏の著作  
(未訳の洋書)

『Creating Deep Democracy; Mysticism, Social Change and the World Inside-Out』(2002刊行予定)  
ディープな民主主義とは何か？個人と社会の関係性を統合し変容させるためのプロセスワークのテクニック。

『The DREAMMAKER'S APPRENTICE; The Psychological and Spiritual Interpretation of Dreams』(2001)  
フロイトから100年たった今、新しい夢の認識=ドリームボディワークの基礎とテクニックを紹介。

『THE QUANTUM MIND, Journey To The Edge Of Psychology And Physics』(2000)  
心理学と量子物理学、夢、数学の世界を統合する新しい科学。宇宙の創造と起源の謎に迫る。

『COMA, A HEALING JOURNEY, a Guide for Family Friends and Helpers』(1999, by Amy Mindell)  
植物人間状態、昏睡状態の人の内的旅を、現場のプロや家族がいかにサポートするか、その技術を紹介。

『COMA, KEY TO AWAKENING: Working With The Dreambody Near Death』(1994)  
臨死体験と夢の機能について働きかける方法を解説。昏睡状態に陥った人々に焦点を当てた最初の著作。

『THE LEADER AS MARTIAL ARTIST,  
An Introduction To Deep Democracy, Techniques And Strategies For Resolving Conflict + Creating Community』  
武道家のようなリーダーとは、どのような人か？政治や経済の場にも応用できる新しいリーダー論。(1992/2000)

『THE DREAMBODY IN RELATIONSHIPS』(1987)  
神話から発せられているメッセージをベースに、新しい関係性のワークを、多くの実例を使って解説する。

『DREAMBODY, The Body's Role In Revealing The Self』(1982/1998)  
夢、おとぎ話、神話と身体的経験とのつながりとは何か？ユング心理学から発展するプロセスワークの世界。

# Medicine for the Heart



心理療法

身近な人間関係、自分の属する社会から世界の国々に至るまで、対立や犯罪といった問題は絶えず起っている。フロイトから始まるこれまでの心理療法が対象にしてきた個人や家族といった狭義の魂への取り組みを、コミュニティ(共同体)の魂へと変容させる事が諸問題を解く手掛かりになるとミンデルは断言する。各地の呪術師やインドのグルとの出会いにおけるシャーマニ

ズムの体験から学び、自分達や世界の現状を取り組む上で最も大切なのは「共に夢を見る事」。通常の意識状態とは別に存在し、夢や身体症状などで語りかけてくる第二の注意力「ドリーミングボディ」、それを更に環境や世界と連動させた「シャーマンズボディ」を得る事が、生き残るために急務となっているのだ。

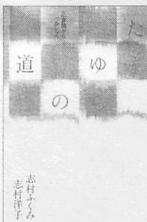


## シャーマンズボディ

心身の健康・人間関係・コミュニティを変容させる新しいシャーマニズム

アーノルド・ミンデル / コスマス・ライブラー / ¥2100

色



藍の色は月に育まれる。中近東の寺院では、人間の智慧や理性的な集結を超えたその完璧さに、天の介入を感じたと著者はいう。時代を超えて存在する美とは、そして、それを育むものはない。京都、伊勢から遙かベルシャへ、写真も美しい隨筆集。

## たまゆらの道 正倉院からペルシャへ

志村ふくみ、志村洋子 / 世界文化社 / ¥2800

関係性



<弱さ>の裏に抱え込む<弱さ>。精神障害者施設、風俗店、ゲイバー、ダンススクール、看護の現場などに携る13人が紹介。ケアにあたる人が、ケアを必要としている人に、逆にケアをされているという。支え、支えられる関係性を哲学する。

社会・文明



著者はふとしたきっかけで手にした蚊取り線香に魅入られて本まで書いてしまったのである。蚊取り線香は庶民の生活と密着した大衆商品として親しまれてきた。このように当たり前に何処にでもあるような商品の歴史を繙くことによって庶民の文化の一端が見えてくる。

生物・動物



出会った患者は腰から上に曲がっている600キロのセイウチだった。筋肉を読み、触れるという行為で動物との会話は始まる。感情をストレートに出して駆け寄ってくるペンギン、うつりする馬、噛みつこうとするイルカと先生の魅力的な交流。

## マッサージ台のセイウチ

グリエルモ先生の動物揉みほぐし診療記  
A・グリエルモ、K・リン / 早川書房 / ¥1900

## <弱さ>のちから ホスピタブルな光景

鷺田清一 / 講談社 / ¥1600

物語



人と違う才能をもつ人は、その能力ゆえ世間に翻弄されることがあるという。しかし、困難を乗り越えて初めて能力の意味を知ることを本書は教えてくれる。なぜか翼が生えた空飛ぶ猫である主人公ジエーンは田舎と都会の暮らしに翻弄されつつも自分らしい生き方を見つけてゆく。

## 空を駆けるジェーン Jane on her own

アーシュラ・K・ルーガー / 講談社 / ¥1500

日本



「清め」の力を持つと考えられていた水は、神社では聖域に入るための禊ぎとしての機能を持つ。また仏教においては水は仏を供養する六種供具の一つである。その役割を茶道に取り入れたのが庭園にある手水鉢である。本書は茶道に於ける手水鉢の歴史と種類を美しい写真と共に解説している。

## 手水鉢 庭のデザイン 3

中根史郎他 / 学習研究社 / ¥1800